

平成21年6月25日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19592468

研究課題名（和文） 経験型実習教育の研修プログラム開発研究

研究課題名（英文） A Study on Program Development of “Empiric Nursing Practice”

研究代表者

安酸 史子（YASUKATA FUMIKO）

福岡県立大学・看護学部・教授

研究者番号：10254559

研究成果の概要：経験型実習教育の研修プログラムとしては、理論編と事例検討を組み合わせて行うことが効果的であった。理論に関しては、繰り返し学ぶことで理解が深まることから自己学習用にDVDは意義があったが、解説がないと理解が難しいことから、典型事例のDVDを作成し、理論編と合わせて活用するプログラムを検討することが今後の課題として残った。事例検討に関しては、実際に助手・助教が経験した事例の検討をすることで多くの学びが得られた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	1,800,000	540,000	2,340,000
平成20年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：実習教育、教材開発、経験型実習、研修プログラム

1. 研究開始当初の背景

看護基礎教育の中で、臨地実習は看護職としての臨床実践能力を身につけるために重要な学習の場である。臨地実習の教育方法論として、安酸らは「経験型実習教育」を提唱し、自ら看護教師として実習指導を担当しながら、臨床指導者や看護教師を対象とした実習指導者講習会等で講演やワークショップを開催する中で、経験型実習教育の実践への適用について検討を繰り返してきた。

平成15年に開学した福岡県立大学看護学部では、実習教育を経験型で行うことを理念として打ち出し、取り組んできた。平成16年度

には基盤研究（B）の助成を受け、経験型実習教育のシステム化についての研究を行った。その研究において、精神看護領域と成人看護学領域の実習前ワークショッププログラムを開発し、実習後のワークショップも実施した。精神看護実習においてはチームティーチング体制の強化を図るために、ワークショップの企画運営を臨床指導者と教員が共同で行うことを試みた。また離れた場所の実習施設には出前ワークショップを企画し、臨床指導者だけでなく、スタッフ全員を対象としてワークショップを実施した。事例検討会（実習施設の看護師20名前後、教員10名前後の参加）で

は実際に担当した学生事例を取り上げ、経験型実習教育の考え方に照らして、率直に意見交換を行い、事例の検討をした。ワークショップ参加者へのアンケート結果では、約7割が実習教育に役立った、約8割が実習中の連携に役立ったと答えており、経験型実習教育の実習前と実習後のワークショップが効果的であったという評価を得ているが、経験型実習教育には教師としての高い実践能力が求められることから、継続的な取り組みが必要であることが分かった。

欧米では、大学教師も教授活動の訓練を必要とする職業であるとの見解から、教師教育や教師訓練の必要性が重視され、組織的な取り組みが行われている。福岡県立大学では学部長が経験型実習教育の提唱者であることから、開学初年度から全学的な取り組みを開始し、来年度からの独立行政法人化後の中期計画・目標の中でも経験型実習教育の推進を挙げてあり、経験型実習教育に関する組織的取り組み体制は整っている。

以上のことから、実習領域ごとに典型事例の「教材化」のワークを取り入れたワークショップのプログラム開発を行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

実習領域ごと（基礎看護学領域、成人看護学領域、精神看護学領域、老年看護学領域）によく遭遇する領域特有の典型的な指導場面や指導困難な場面を抽出し、ワークショップで使用する教材事例を作成する。教材事例ごとに教材を使用した「教材化のワーク」を取り入れたワークショップのプログラムを開発する。また学生、教員、臨床指導者のコラボレーションによる実習前ワークショップのプログラムを検討する。

本研究では、経験型実習教育の研修プログラムを領域ごとに初級編・アドバンス編と開発し、アドバンス編では教材化の具体的な方法の研修プログラムの開発を目的とする。

3. 研究の方法

全体の研究デザインとしては、アクション・リサーチの方法論をとり、経験型実習教育に関する研修の企画・実施・評価をしながら、同時に研修プログラムの開発・修正を行った。

学生及び臨床実習指導者に対する質問紙調査に関しては、福岡県立大学研究倫理委員会の承認を得た。

4. 研究成果

(1) 経験型実習教育の理論編の学習教材の作成

経験型実習教育の理論編の学習教材としては以下の4つのDVDを作成し

- た。
- ①「経験型実習教育」：経験から学んでいくという学力を重視する実習教育の方法論。J. デューイの教育哲学が基盤。学生が経験の意味を再構築するプロセスを対話を通して、教師がいかに関与するか。(19分24秒)
 - ②「ケアリングと経験型実習教育」：経験型実習教育で目指すところは、ヒューマンケアリング。ケアリング教育と経験型実習教育の関係について述べる。(16分52秒)
 - ③「指導型実習と経験型実習の指導アプローチの違い」：行動主義モデルでの指導型の方法論ではなく、経験型実習教育だとのように学生に関わっていくのかについて、発問の仕方などを具体的に解説。(14分11秒)
 - ④「経験型実習指導教員へのアドバイス」：学生に教えた気持ちは先行すると、指導型実習になりがちであることから、具体的な事例を解説しながら指導教員に対するアドバイスを整理した。(19分55秒)

(2) 学生への質問紙調査

経験型精神看護実習において、学生が臨床指導者や教員の患者への対応をロールモデルとした場面とその学びについて調査した。対象は精神看護実習を終えた学生74名。回収数は43部、回収率58.1%。その結果、「実習中、臨床指導者や教員の患者への対応をロールモデルとして、参考にしたか」という問いに対して、5段階評価のうち、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」と答えた対象者は、30名(69.8%)であった。これに対し、実習終了後に臨床指導者や教員に、実習中学生にロールモデルを示すことができたかどうか質問紙調査を行ったところ、5段階評価のうち、「全くそう思う」「だいたいそう思う」と答えた人は全体の47.6%と半数以下であった。また、学生は患者の対応で困ったとき、何かを促すときはもちろんのこと、患者に楽しんでもらいたいときにも、臨床指導者や教員のロールモデルを見て、「素晴らしい」と感動し、個別性のある看護について学んでいると回答していた。以上のことから、実習指導場面において教員や臨床指導者は、自分たちが思っている以上に学生にとっては、ロールモデルとしての役割が高いことが分かった。経験型実習教育においては、単にロールモデルを示すだけでなく、対話を通して、具体的に学生が感じたことや気づいたことを聞いて、そこから学びを深めていく

学習支援を目指していることから、実際の事例を丁寧に検討していく必要があることが示唆された。

(3) オリジナルの視聴覚教材作成の試み

実習指導者及び教員を対象としたワークショップを通して、実習で学生が困難を感じる場面や、教員や指導者が指導困難を感じる場面には一定のパターンがあることが研究者間の話し合いで分かってきたことから、精神看護領域の事例でオリジナルの視聴覚教材の開発を試みた。急性期と慢性期の事例のシナリオを書き、デモ版のDVDを作成し、臨床実習指導者を含めた研究者間で検討したが、DVDを視聴する学生の反応に対する危惧やリアリティに欠けることなどの課題が多く、研修で使用できる完成版のDVD作成には至らなかった。

今回作成した視聴覚教材の問題点と今後に向けた対策は以下の通りである。
＜問題点1＞DVDを視聴する学生の反応に対する危惧

①否定的な感情反応：精神科の急性期によく起こりやすい困難場面を見せることで不安や恐怖感を惹起する可能性があるのではないか。患者のイメージが固定化する可能性があるのではないか。

→対策

- ・学生の意見を聞く
- ・患者の健康的な面が見える場面にする

＜問題点2＞リアリティに欠ける

①事例にリアリティがない：学生が受け持つ可能性が低い事例で、患者像が一面的である。病態の説明がないので患者を理解しにくい。

②場面にリアリティがない：撮影場所が実習教室であり、リアリティに欠ける。

→対策

- ・現実に近い事例にする。
- ・制作者の意図を説明する。
- ・場面にリアリティを持たせるために撮影を病院で行い、臨床実習指導者が学生と一緒に看護している場面を入れる。
- ・プロの役者を起用する。

＜問題点3＞看護師が見ても状況が分かりにくい

①展開が早すぎる：展開が早くてついでに行けない。1場面が短すぎる。

②前後のつながりが分からない：場面が細切れすぎる。

③情報量が多すぎる：ナレーションが理解しづらい。場面が多すぎる。

④制作上の技術的問題：役者の表情やアイコンタクトがよく見えない。ナレーションが聞き取りにくい。

⑤学生の情報が無い

⑥どう解釈して良いか分からない：制作者の意図が伝わりにくい。

→対策

- ・人間の情報処理速度に合わせた情報の提供
- ・場面を分割して視聴できるよう編集する
- ・1場面の時間を長くする
- ・制作技術の向上
- ・学生像を描く
- ・実習グループ像を描く
- ・視聴覚教材の使い方を示す

(4) 経験型実習教育の研修会及びワークショップ、合同実習調整会議の実施

助手・助教を対象にした経験型実習教育研修を3回実施した。理論編のDVD教材は事前学習用教材とし、事例検討に関しては、個人情報に配慮して実際事例での検討を行い、その都度アンケート調査した。また、全実習領域の臨床実習指導者と教員が会しての分科会と合同会を実施して、経験型実習教育のシステム化に向けて課題と展望について話し合った。経験型実習教育の研修プログラムとしては、理論編と事例検討を組み合わせる行うことが効果的であった。事例検討は、実際事例を提出してもらい、検討することで多くの学びが得られたというアンケート結果であった。ワークショップ用に典型事例を教材化して、視聴覚教材に作成することが今後の課題として残った。

(5) 経験型実習教育の事前学内演習の方法についての検討

経験型実習教育では、学生の経験に焦点を当て、「科学の知」よりも「臨床の知」の修得に焦点を当てた関わりをする。「科学の知」を低く捉えているわけではない。学生自身に事前学習として必要な知識・技術を実習前に身につけて欲しいと願っている。そのために、事前学内演習の「看護実践論」において、知識・技術の必要性を喚起する演習を工夫し、その成果をまとめた。

既製のVTRを視聴させ、分からなかったこと、気になったことなどを書き出させ、次までに調べてくるよう指示する(個人ワーク)。調べた内容を持ち寄り話し合わせる(グループワーク)。その後、VTRの内容について概説する。この個人ワークは、経験型実習教育でのリアリティをもった学びにつなげること

を意図している。ここでは、聞き間違えの経験（例：CPKをCTKと聞き違える）とそれに伴って、調べても分からない経験を複数の学生がする。そのような状況に陥る可能性は誰にでもあること、そのときにはどのようにしたらよいかなどについて話し合い、実習前の不安の軽減につながった。(p<0.01)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 福田和美・赤木京子・渡辺智子、老年看護の実習における臨床指導者研修会の意義と効果、福岡県立大学看護学研究紀要、6巻2号、78-84、2008.
- ② 佐藤香代・津田智子・山下清香・松枝美智子・小路ますみ・渡邊智子・石川フカエ・宮城由美子・安河内静子・田淵康子・森崎直子、看護学制の実習到達度の評価と今後の課題—第1回合同実習調整会議における調査から—、福岡県立大学看護学部紀要、6巻1号、40-47、2008.
- ③ 安永薫梨・安田妙子・松枝美智子・中野榮子・安酸史子、経験型精神看護実習において学生が臨床指導者や教員の患者への対応をロールモデルとした部メントその学び、日本看護学会論文集、39巻、47-49、2008.

[学会発表] (計 2 件)

- ① 安酸史子・中野榮子・松枝美智子・渡邊智子・赤木京子・福田和美・安永薫梨・安田妙子、経験型実習教育の事前学内演習における教授方法、第18回日本看護学教育学会、2008、筑波.
- ② 安永薫梨・安田妙子・松枝美智子・中野榮子・安酸史子、経験型精神看護実習において、学生が臨床指導者や教員の患者への対応をロールモデルとした部メントその学び、第39回日本看護学会（精神看護）、2008、神戸.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安酸 史子 (YASUKATA FUMIKO)
福岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号：10254559

(2) 研究分担者

中野 榮子 (NAKANO EIKO)
福岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号：50207841
永嶋 由理子 (NAGASHIMA YURIKO)
福岡県立大学・看護学部・教授

研究者番号：10259674
松枝 美智子 (MATUEDA MICHIKO)
福岡県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50279238
渡邊 智子 (WATANABE TOMOKO)
福岡県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：00268955
安永 薫梨 (YASUNAGA KAORI)
福岡県立大学・看護学部・講師
研究者番号：80382430
小野 美穂 (ONO MIHO)

福岡県立大学・看護学部・講師
研究者番号：20403470
北川 明 (KITAGAWA AKIRA)

福岡県立大学・看護学部・講師
研究者番号：20382377
添田 百合子 (SOEDA YURIKO)

福岡県立大学・看護学部・講師
研究者番号：50512034
藤野 靖博 (FUJINO YASUHIRO)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：20405559
赤木 京子 (AKAGI KYOKO)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：20423981
福田 和美 (FUKUDA KAZUMI)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：50405560
大見 由紀子 (OHMI YUKIKO)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：10300485
清水 夏子 (SHIMIZU NATUKO)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：80468305
坂田 志保路 (SAKATA SHIHOJI)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：10438418
梶原 由紀子 (KAJIWARA YUKIKO)

福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：50512026
奥 祥子 (OKU SHOKO)

宮崎大学・医学部・准教授 H19のみ
研究者番号：40284921

田淵 康子 (TABUCHI YASUKO)

福岡県立大学・看護学部・講師 H19のみ
研究者番号：90382431

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

安田 妙子 (YASUDA TAEKO)
福岡県立大学・ヘルスプロモーション実践
研究センター・客員研究員